

主として日本統治時代の韓国に おける救癩事業と周防正季博士

佐久間温巳

韓国での癩病に関する最古の記録は、西歴四五三年の「三国遺事」に書かれた「癩疾」だと云われているが、これが癩と同一であるかどうかは断定できない。医学的に癩と云える疾病の記録は、李朝第四代世宗の十年（一四二八）十月の「世宗実録」にみられる。他方、癩患者の救療に関する最も古い記録は、世宗二七年（一四四五）十一月の「実録」で、済州島に癩病流行し、治療所を設け病人を集め、² 医生・僧人をして治療せしめたことが書かれている。他に、二、三の記録があるが、近代医学による癩の救療は今世紀に入ってからで、日本と同じく韓国でもまず外人宣教師によって始められた。それらには、次のような施設があった。³

(一) 大邱 一九一二年米国北長老教会のフレッチャーが、

大邱府南山町で救療を始め、翌年三月には患者十名を収容。以後患者が増加したので、一九一六年大邱府達城郡達西内唐洞に八〇名収容の大邱癩病院を新築。一九三五年七月当時の収容患者は六五〇名であった。尚、一九三八年五月以来大邱愛楽園と改称した。

(二) 光州 一九〇九年米国南長老教会のウィルソンが、光州郡孝泉面鳳仙里に光州癩病院を設立。一九二六年十一月、麗水郡栗村面新豊里の半島に移転し、麗水ビダーウォルフ癩病院と改称、更に一九三五年三月、麗水愛養園となった。一九三八年末の収容患者は七〇四名を数えた。

(三) 釜山 一九一〇年米国北長老教会のアービンが、釜山赤崎半島に釜山癩病院を建設し、数名の患者を収容したのが嚆矢で、翌年英宣教医マッケンジーが所長となった。その後発展して一九三七年には、釜山相愛園と改称した。一九三九年末の収容患者は六一一名であった。

一九一〇年八月の日韓併合後、多くの総督府立医院が設立されたが、⁴ 癩療養所は一九一六年二月総督府令第七号に

よって計画された小鹿島慈恵医院が最初であった。翌一九一七年四月、定員百名の病院が完成し、業務が始められた。初代院長は蟻川享一等軍医で、場所は全羅南道高興郡錦山面にある小鹿島という島の一面であった。その後、花井善吉二等軍医正、矢野俊一郎氏と院長が変わったが、施設も次第に拡張され、一九三〇年には收容患者七〇〇名となつた。

小鹿島慈恵医院が飛躍的に発展したのは、昭和八年九月に周防正季博士が院長に就任してからで、彼の政治力、実行力に加うるに、昭和七年十二月に結成された朝鮮癩予防協会の全面的支援をうけ、世界第一と云われた大療養所が建設されるのである。因に、小鹿島慈恵医院は昭和九年十月より小鹿島更生園と改称した。

周防正季博士は、明治十八年十月八日、滋賀県栗太郡老上村で、代々韃^{タタ}者^ザ八幡宮^{ヤチハチノミヤ}宮司^{ミヤジ}の大^{オホ}神^{カミ}家^ノの四男として出生。

明治三五年、同村の医家周防氏の養子となり、明治三八年一月愛知県立医学専門学校に入学、同四年三月卒業と同時に県立岡崎病院外科に就職。翌年官界に入り、広島県防疫官補となつた。大正三年養父死亡のため帰郷、開業した

が、同五年には滋賀県技師、学校衛生主事となって再び官途についた。大正八年愛知県技師に転じ、更に大正十年三月には、京畿道衛生課長として渡鮮、総督府技師も兼ね、麻薬中毒の絶滅に尽力した。大正十五年より昭和二年まで、現職のまま欧米に出張、帰国後は開城慈恵医院の医官も兼務した。小鹿島慈恵医院の拡張が計画されるや、自ら進んで院長に就任、モッコをかついで病院建設の先頭に立った。昭和八年小鹿島全島を買収、昭和十年十月、收容人員四〇〇〇人の大療養所が竣工した。更に第二、第三期の拡張工事を進め、昭和十四年には六〇〇〇人收容の世界一大癩病院を完成させた。その功績により勅任官待遇となり、昭和十五年には朝鮮施政三十週年記念第一回朝鮮文化功労賞を授賞、更に同年九月には、第十四回日本癩学会会長をつとめた。

多数の患者を收容する癩療養所の管理運営は困難を伴い、その遂行にはある程度の束縛が必要となるが、それが患者の恨みを買ったのか、昭和十七年六月二〇日一狂暴患者の凶刃に倒れ、五七歳の生涯を終えた。「小鹿島に骨を埋める覚悟」という就任の挨拶が現実となり、誠に哀惜に

堪えない思いである。

- (1) 三木栄 朝鮮医学史及び疾病史
- (2) 申汀植 韓国の癩 一九八二年四月
- (3) 西川義方 朝鮮小島島更生園を通して観たる朝鮮の救癩事業

- (4) 佐久間温巳 初期の植民地医療における現役軍医の役割日
本医学誌 三十卷二号 六四—六六 昭和五九年四月
尚、御教示いただいた邑久光明園園長原田禹雄先生、長島愛
生園園長友田政和先生に感謝の意を捧げます。

(西尾市民病院)

太平洋戦争末期の陸軍衛生事情

(第一報 栄養及び体力の状況について)

※¹⁾ 清水勝嘉・※²⁾ 三宅雅史

太平洋戦争全般の軍の衛生事情は関係資料の焼却散逸等のため、精密な統計をみることは困難である。とくに昭和十九年以降のものにその傾向が著しい。

ここでは終戦直後、陸軍省医務局が連合国軍総司令部宛に行った「陸軍衛生関係事項報告」をとりあげ、本土決戦準備における衛生事項を報告する。

陸軍衛生関係事項報告は

一、昭和20・9・5 陸軍省医務局
衛生機関所在並ニ病床数表

二、昭和20・9・5 大本営陸軍部

陸軍病院船現況調

三、昭和20・9・5 陸軍省医務局

日本武装軍ノ健康ニ関スル報告